

「旧約の信仰者たちの手本」 エリヤ① 登場前の時代背景 (11:32~34)

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (4) 警告は、肉体の滅びを招くということであって、霊的な救いを失うことではない。

2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
 - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
 - ② 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
 - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
 - ④ 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
 - ⑤ 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
 - ⑥ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
 - ⑦ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。

- (3) 前回までに、預言者サムエル、そしてサムエルによって油を注がれ、王となったダビデについて学んだ。
- (4) 今回から、「預言者たち」に入る。ヘブル人への手紙11:32~34が指す預言者たちとは、次ページの表に見るように、エリヤ、エリシャ、ダニエル、ダニエルの3人の同僚たちである。
- (5) ダビデの後継者となったソロモン王の治世は40年間。
 - ① 治世4年目に、神殿建設着工。7年間で完成。
 - ② 神殿の次に、王宮を建設。完成までに13年間。
 - ③ ソロモンへの主のことば I列9:1~9
 - ④ ソロモンの繁栄 I列10:4~5、21、23、27
 - ⑤ ソロモンの背教 I列9:24、11:1~13
- (6) ソロモン王の死後、王国は北と南に分裂。北王国で活動した預言者がエリヤ、そしてエリヤの後を継いだのがエリシャである。今回は、エリヤ登場前の時代背景。

このときの、ソロモンの心の中にあつたいろいろな葛藤を回顧して書かれたのが、「伝道者の書」

手本となる生き方	信仰者と(関連箇所)		箇所
試練の中で、信仰による <u>勇気</u> を発揮した	イスラエル国史に見る信仰(士師たち・王たち・預言者たち) 士師たち : ギデオン、バラク、サムソン、エフタ 王たち : ダビデ 預言者たち : サムエル		32~34
国家的勝利を得た	国々を征服した	ヨシュア、士師たち、ダビデ	33
	正しいことを行った	ダビデ、サムエル	
	約束のものを得た	ギデオン、バラク、ダビデ	
個人的救出を体験した	獅子の口をふさいだ	ダニエル、サムソン、ダビデ	34
	火の勢いを消した	ダニエルの3人の同僚たち	
	剣の刃をのがれた	モーセ、 <u>エリヤ、エリシャ</u> 、エフタ、ダビデ	
個人的な賜物を発揮した	弱い者なのに強く	ギデオン、サムソン、ダビデ	
	戦いの勇士となり	ヨシュア、バラク、ダビデ	
	他国の陣営を陥れた	ダビデ、ヨシャパテ	
信仰は <u>死を乗り越える</u>	<u>女たちは死んだ者をよみがえらせてもらった</u> 【I列17:8~24、II列4:8~37、ルカ7:11~17、ヨハネ11:1~44】 (これに対して) <u>ほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえり</u> を得るために、釈放されることを願わないで・・・		35~38
ほかの人々は、死に至るまでの信仰を示した	あざけられ、むちで打たれ	エレミヤ エレ20:2	36
	鎖につながれ、牢に入れられる	ヨセフ	
	石で打たれ	ゼカリヤ II歴24:20~22	37
	のこぎりで引かれ	イザヤ	
	試みを受け	ヨセフ	
	剣で殺され	ウリヤ IIサム11:14~25、12:9	
	羊とやぎの皮を着て歩き回り	エリヤ II列1:8	
	乏しくなり悩まされ苦しめられ	預言者たち	
	荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよった	オバデヤ I列18:3~6	38
	この世は、彼らにふさわしい所ではなかった		

■王国の分裂

1. 分裂の原因

- (1) ソロモンの背教により、主はソロモンに敵対する者を起こした (I列 11:14)
- ① エドムの王家の子孫ハダデ。エジプトと同盟関係 (I列 11:14~22)
 - ② ツォバの王ハダデエゼルの残党レゾン。ダマスコを拠点にアラムを支配 (I列 11:23~25)
 - ③ ソロモンの部下ヤロブアム (I列 11:26~40)
 - エフライム族
 - ソロモンは彼の手腕を認めて、ヨセフの家 (エフライム族とマナセ族) の役務のすべてを管理させた (28節)
 - ヤロブアムは、内心、ソロモンに代わって自分が王となることを望んだ (37節)
 - 預言者アヒヤから伝えられた主のことば (29~39節)
 - ソロモンはヤロブアムの反逆を察知して、ヤロブアムを殺そうとしたので、ヤロブアムはエジプトに亡命した (40節)
- (2) ソロモンの死後、全イスラエルがシェケムに集会した (I列 12:1~24)
- ① シェケムは、イスラエル民族の「長子の権利」を象徴する地
 - ヤコブは、12人の息子たちの中からヨセフを長子の権利を持つ者とし、カナンの地の中で自分の土地として唯一持っていたシェケムの地をヨセフに与えた (創 48:22)
 - 出エジプトの後、ヨセフの遺骨は、シェケムの野の一画に葬られ、そこはヨセフ族 (エフライム族とマナセ族) の相続地となった (ヨシュ 24:32)
 - ヨシュア (エフライム族) は死ぬ前に、全イスラエルをシェケムに集め、主に仕えることを誓わせた (ヨシュ 24:1~29)
 - ② 全イスラエルは、レハブアムを王とするために、シェケムに集まった (1節)
 - ③ このとき人々は、エジプトからヤロブアムを呼び寄せた (2~3節)
 - ④ 全イスラエルは、ヤロブアムを代表に立て、過酷な労役と重い税を軽くするようにレハブアムに要求した (3~4節)
 - ⑤ レハブアムは3日後に回答することにした (5節)
 - ⑥ レハブアムは、2組の人々に相談した。ソロモンに仕えていた長老たち、そして自分に仕えている若者たち。それぞれの意見を聴いた。
 - ⑦ レハブアムは、長老たちの助言を退け、側近の若者たちの意見を採用した。3日後、ヤロブアムと民たちに強圧的な回答をした (6~15節)
 - 「私の父はおまえたちをむちで懲らしめた」
 - もしソロモンがイスラエルの民をむちで打ったというのが事実であれば、それは民を奴隷扱いして労役に就かせたことになる。これは律法違反である (レビ 25:39~46)。
 - ソロモンの父、ダビデ王は、各種の労働に就かせるためにアモン人を徴用した (IIサム 12:31)。また、神殿建設のための石切り工はイスラエルの地にいる在留異国人を召集した (I歴 22:2、15~16、I列

5:15、II歴2:17~18)。

- ソロモンもイスラエル人を奴隷にしなかった (I列9:19~22)。
- しかし、ソロモンがイスラエル人、特にヨセフ族であるエフライム族とマナセ族に土木建設の労役を課したのは事実である。そして、その管理の任務にあったのが、ヤロブアムである (I列11:27~28)

- 「さそりで懲らしめる」=さそりは、頭胸部・前腹部・後腹部から成る。尾のように見える部分は後腹部、その先端にかぎ状のとがった針があって、そこに毒腺がある。後腹部を背方に翻して、他の動物を刺すと、毒腺内の毒液が注射される。さそりに刺されると、激痛に襲われる。人間にとって致命的な猛毒を持つものは、3~4種類ある。普通昼間は石の下や枯草の中などに隠れ、夜間に活動して昆虫などを捕食する。
- この箇所の「さそり」は、毒虫のさそりではなく、「金属片を埋め込んだ鞭」を指すという説もある。

- ⑧ レハブアムから民心は離れ、全イスラエルはレハブアムを王とする宣言を中止し、散会。ユダの町々に住んでいる人々だけでレハブアムを王とした。レハブアム王は、ソロモン王のときからの役務長官アドラムを派遣したが全イスラエルは彼を石で打ち殺した。レハブアム王にも危険がせまり、王はようやくの思いで馬に引かせる戦車に乗りこみ、エルサレムに逃げ帰った(16~18節)

2. 分裂とヤロブアムの罪

- (1) 全イスラエル(ユダとベニヤミンを除く)は、ヤロブアムを全イスラエルの王とした(I列12:20)→北王国をイスラエル、南王国をユダと称するようになった。

- (2) ヤロブアムは、シェケムを再建して、そこに住んだ。さらに、ヨルダン川を東に渡り、ペヌエルを再建した(I列12:25)

- ① 北王国の首都は、ティルツァ(I列14:17)に置かれた。後の首都サマリヤの東約10kmの町。☐ティルツァは「快適」という意味。雅歌6:4では、ソロモンが美しい女性をこの町にたとえたほど、この町はその美しさで知られていた。

- ② ヤロブアムの心配:民がエルサレムの神殿祭儀に参加する限り、自分の王位は不安定である(26~27節)

- ③ ヤロブアムの対策(28~33節)

- 金の子牛を二つ造り、一つは南王国ユダとの国境に近い町ベテルに据え、もう一つは北端の町ダンに据えた。「ここに、あなたをエジプトから連れ上った神々がおられる」(28~30節)

- 「金の子牛」二つは、エルサレムの神殿のケルビム(天使)の像二つに模したもの。

- ケルビム像二つはエルサレム神殿の内堂(至聖所)に並んで据えられている。それに対して、金の子牛は北王国の国土の北端と南端に設置されている。ヤロブアムは北王国の国土全体を聖なる神域に見立てたのかもしれない。そして、後述するように、各町の高き所に宮を設け、祭司を任命して、人々がエルサレムに行く必要はないようにした。

- ケルビム像はエルサレム神殿の奥の部屋に設置されていて、人々の目にはふれず、礼拝の対象でもない。これに対して、「金の子牛」像は、人々の目にふれるように設置された。その結果、民が「金の子牛」像を礼拝するようになった。それが、「罪となった」(I列12:30)。
 - 町々の高き所に宮を建てた(31節、I列13:32)。
 - レビの子孫でなく、一般の【最下層の】民の中から祭司を任命して、高き所の祭司とした。だれでも志願する者を任職した(31節、I列13:33)。
 - 祭りの日を、自分で勝手に考え出して、第八の月の15日とし、ベテルに造った祭壇でいけにえをささげ、香をたいた(32~33節)。
 - このような背教の仕組みを、列王記は「ヤロブアムの道」・「ヤロブアムの罪」と呼んで(I列15:34、II列10:29~31、13:11、15:9、24、28)後世への警告とした。
- (3) ひとりの神の人が、ユダからベテルに来て、祭壇に向かって預言する(I列13章)
- ① 「ダビデの家系から、ヨシヤという男子が生まれる。ベテルの祭壇の上で、そこに仕えていた祭司たちの骨が焼かれる」という預言(1~10節)
 - ② 神の人は、ベテルに住んでいた別の預言者に騙されて、神の命令に違反し、死ぬことになる(11~32節)
- (4) ヤロブアムのその後についての総括:ヤロブアムは、悪い道から立ち返ることをせず、その家系は断絶することになる(I列13:33~34)
- (5) 預言者アヒヤによるヤロブアムへの預言(I列14:1~18)
- ① ヤロブアムの罪(7~9節)
 - ② ヤロブアムの家系断絶の預言(10~11、14節) → (7)
 - ③ ヤロブアムの子アビヤの死、しかし彼は主の御心にかなっていた(12~13節)
 - ④ 北王国イスラエルの滅亡の預言(15~16節) → II列15:29、17:3~18
- (6) ヤロブアムの死、その子ナダブが代わって王となる(I列14:19~20)
- (7) イッサカル族のバシヤによる謀反、ヤロブアム家は根絶やしにされる(I列15:25~30)
3. 祭壇に向かっての預言の成就是、約300年後(II列23:15~16)
- (1) ヤロブアムの在位は、紀元前931年頃から22年間(I列14:20)
 - (2) 南王国のヨシヤ王は、紀元前640年頃から31年間(II列22:1)
 - (3) II列22:3、ヨシヤ王の治世第18年(紀元前623年頃)
 - ① II列22:3~13、エルサレム神殿で「律法の本」が発見される
 - ② II列22:14~20、女預言者フルダを通して語られた主のことは
 - ③ II列23:1~14、ユダの地でのきよめ
 - ④ II列23:15~18、ベテルでのきよめ=預言成就
 - ⑤ II列23:19~20、サマリヤの町々でのきよめ
 - ⑥ II列23:21~23、エルサレムで過越の祭

4. 背教の時代における預言者の心得

- (1) イスラエル民族の歴史の中で、大きな危機はこれまでに2回。
 - ① エジプトで奴隷の民とされ、さらに男子の新生児を殺されたとき
 - ② 王国が分裂し、偶像崇拜や幼児犠牲の風習に染まった背教のとき第1回目はモーセによる解放、第2回目は何人もの預言者が遣わされての警告、いずれも奇跡が伴う。奇跡は歴史上いつも起きることではない。
- (2) このあと、奇跡が起きる時代は、メシアの公生涯、そして大患難期である。この二つの時期の特徴は、サタンと悪霊の活動が顕著になることである。
- (3) 異常な時代には、その時代に特有な出来事もある。ユダから出て来てベテルで預言し、獅子に裂き殺された「神の人」の出来事もその一つである。この出来事は、石碑にもなり、後世に語り伝えられた(Ⅱ列23:17)。これは、背教の時代に入っていく中で、預言者が心得ておくべきことを、教えている。エリヤやエリシャが登場する前に、主が備えておられたのである。
- (4) その心得とは次のようなことである。
 - ① 預言を語ると、それを聴いた権力者が預言者を脅すことがある。「彼を捕らえよ」(Ⅰ列13:4)
 - ② 権力者が主のしるしを見て預言者にとりなしの祈りを求める、ことがある。そのときは、主に願ってあげなさい(Ⅰ列13:5~6)
 - ③ 権力者が預言者を自分の側につけようとして、食事に招くとか、贈り物をしようとするなどがある。それに応じてはならない(Ⅰ列13:7~9)
 - ④ 神からいったん自分が受けた命令は、それを変更するのも、直接、神からそのように言われたときのみである。同じ預言者仲間だからといって、人から聞いたことばに従って変更してはならない(Ⅰ列13:18、21)
- (5) 「神の人」は、主の命令を守らなかったために、その罪の刈り取りとして「獅子に裂き殺される」という厳しい肉体的な死を被った。ダビデの罪の刈り取りのときと同じく、多く与えられた者には大きな責任がある。預言者として立つことは、大きな責任を伴うことである。
- (6) しかし、この「神の人」もまた、信者としての霊的な救いは失っていない。「獅子はその死体を食わず、ろばも裂き殺していなかった」(Ⅰ列13:28)とは、そのしるしである。ベテルの老預言者は、自分の墓に彼のなきがらを納め、彼の骨を葬った。そして息子たちに言った。「私が死んだら、あの神の人を葬った墓に私を葬り、あの人の骨のそばに私の骨を納めてくれ」・・・二人の預言者はともに、来るべきメシアの王国において復活し、麗しい地に立っていることであろう。